

東近江管内の令和5年産「きらみずき」生育の状況

令和5年(2023年)11月
東近江農業農村振興事務所農産普及課

1 東近江管内における令和5年産「きらみずき」栽培結果

○栽培面積：32.1ha、生産者数：39戸
(内、オーガニックでの栽培：7.5ha、7戸)

○施肥設計
(下表の標準施肥量を基に栽培を実施)

○収量・品質
・実収の平均：398kg/10a (188kg/10a～626kg/10a)
(オーガニックでの栽培は除く。)
・一等米比率：85.3% (10月16日時点)

施肥法	基肥	追肥	穂肥	合計
水稻跡	4kg	(1kg)	4kg	8kg
大豆跡	0～3kg	-	4kg	4～7kg

※数字は10a 当たり窒素成分量。有機質肥料を使用。

2 実証ほでの栽培結果 (管内11か所に実証ほを設置)

1) 育苗

・出芽・苗立ちは安定し、苗揃いも良好であった。



(写真) 苗の様子

2) 移植・初期生育

・移植は5月初旬～5月20日頃に概ね実施され移植後は気温・日照時間が平年並であったことから、活着および初期生育は概ね順調であった。
・大豆跡ほ場の一部で、有機物が多いことによる還元障害で、生育が緩慢となった。

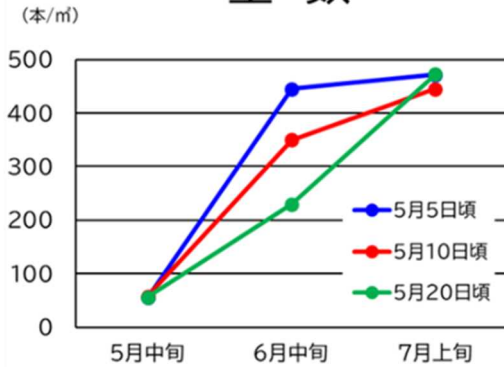


(写真) 移植30日後の様子

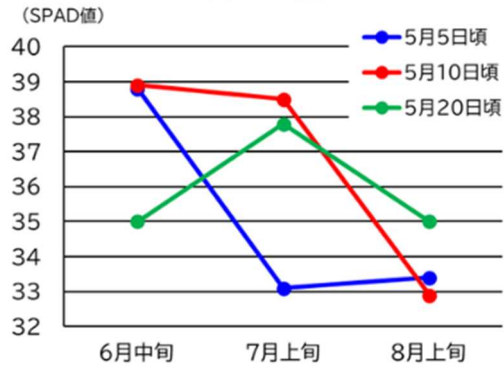
3) 分けつ期～幼穂形成期

・中干し以降、大きな問題もなく良好な生育であった。このため、初期生育が緩慢であったほ場でも、分けつは良好で莖数は確保できた。
・一方、初期生育が旺盛となったほ場では、穂肥時期までに葉色が極端に低下し、追肥が必要であった。特に、移植時期が早いほ場では顕著であった。
・病害虫の発生は、5月下旬以降、曇りや雨の日が多かったため、葉いもちの発生が多く見られ、穂いもちへの発生拡大が懸念され、一部のほ場では、穂肥を減肥するなどの対応を行った。

茎 数



葉 色



6月下旬頃



7月上旬頃



(写真) 葉色が低下した様子

(写真) 葉色いもちが発生した様子

4) 出穂期・成熟期

- ・ 出穂期は8月9日頃、成熟期は9月15日頃であった。
- ・ 登熟期間中の高温により、稲体が必要とする窒素成分量が不足して葉色の低下が著しかった。特に、いもち病の発生拡大を防ぐため穂肥を減量したほ場では顕著であった。
- ・ 病害虫の発生について

いもち病 : 7月中旬～8月上旬が高温で雨が少なく、晴れの日が続いたことから、葉いもちの進展が止まり、感染は最小限に抑えられた。

イネ縞葉枯病 : 一部のほ場では出すくみや穂枯れが見られた。

ごま葉枯病 : 生育後半に栄養が維持できなかったことから、多くのほ場で発生し、一部では多発生であった。

(表) 移植日ごとの生育ステージ

移植日	幼穂形成期	出穂期	成熟期
5月5日頃	7月13日	8月4日	9月12日
5月10日頃	7月17日	8月9日	9月13日
5月20日頃	7月21日	8月12日	9月18日



(写真) 進展が止まった葉いもち



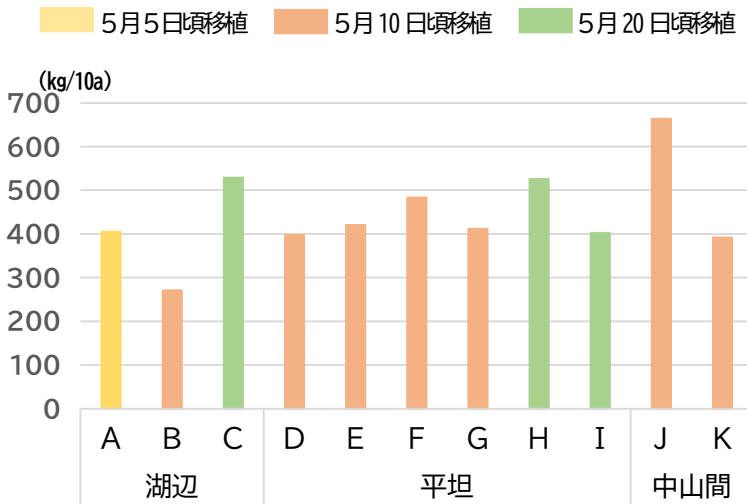
(写真) イネ縞葉枯病による出すくみ



(写真) ごま葉枯病の様子

5) 収量・品質

- ・収量：地帯・移植時期による傾向は見られず、実証までのバラつきは大きかった。
- ・品質：食味値の平均値は79.9 (72.9～86.6) で、タンパク質の平均値は、6.1% (5.3～6.9%) であった。
 整粒歩合の平均値は70.8%(54.7～86.8%)で、整粒歩合が低い地点では、「その他未熟粒」「基部未熟粒」が多かった。



(図) 実証ほ収量結果

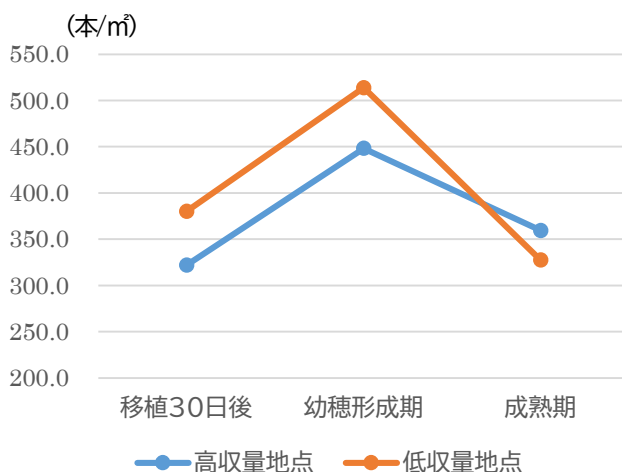
(表) 実証ほ品質結果平均値

食味値	タンパク質 (%)	整粒歩合 (%)
79.9	6.1	70.8

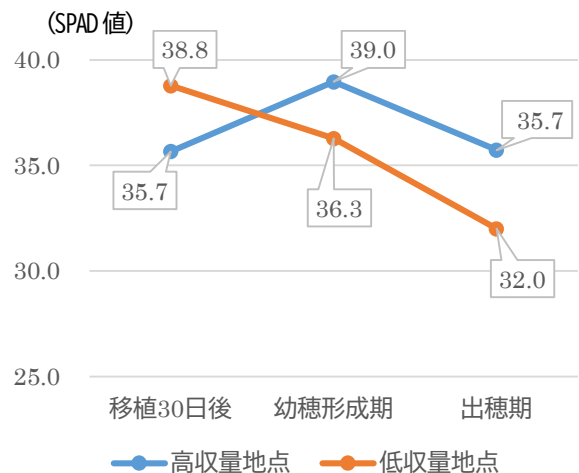
※「食味値」「タンパク質」は食味計による分析結果

※「整粒歩合」は穀粒分別機による分析結果

- ・収量が多かった地点 (収量 510kg/10a 以上) と低かった地点の生育調査の結果を分析した結果、次の傾向が見られた。
 高収量地点：葉色が、生育後半まで維持され、茎数の減少は少なく穂数は確保された。
 低収量地点：初期生育が旺盛となり、茎数が過剰になったため、生育後半まで栄養状態が維持できず、生育ステージが進むにつれて、葉色が低下し、穂数が減少した。
 葉いもちが発生した地点では、穂いもちへの進展を懸念し、穂肥を減量した結果、生育後半まで栄養状態が維持できなかった。
 生育後半まで栄養状態を維持できず、ごま葉枯病等の発生を助長した。



(図) 茎数・穂数の推移



(図) 葉色の推移

3 次年度栽培に向けて

～ほ場準備～

- ・堆肥や土づくり資材を施用し、地力向上に努める。
- ・斑点米カメムシ類やいもち病等の病害虫常発地を避けることで、リスク回避を図る。
- ・有機質肥料等を使用した栽培のため、有機物の分解による還元障害が生じやすい。特に、排水性が悪い湿田や粘土質の土壌では、還元障害が発生しやすいため、収穫後の稲わらや牛ふん堆肥等は早めに鋤き込む。

～移植時期～

- ・初期生育が莖数過剰にならないよう、**移植適期（5/10～5/20頃）**を目安に行う。

～生育期間～

- ・初期生育が旺盛になるなど、穂肥施用時期までに**葉色がSPAD値で35（葉色板3.8）以下**になる場合は、生育後半までの栄養を維持するために**追肥を施用**する。
- ・近年、夏季の高温が進んでいることから、**穂肥は減肥せずに規定量（窒素成分4kg/10a）**を施用する。
- ・生育状況やいもち病などの病害の発生程度に応じて、穂肥の分施や施用時期を遅らせるなどの対応を検討する。

～病害対策～

- ・いもち病 : 温湯消毒等で必ず種子消毒を行い、ケイ酸質肥料の施用、余剰苗の除去、畦畔除草により風通しを良くするなど発病やまん延しにくい環境をつくる。
- ・イネ縞葉枯病 : 刈り株再生芽（ひこばえ）やイネ科雑草が病原体の発生源になるため、前作水稻の収穫後は早期に耕耘し、畦畔等ほ場周辺の雑草を刈り取る。
- ・ごま葉枯病 : 生育後期に栄養凋落が起こると発生が助長されることから、堆肥施用や深耕等の土づくり、登熟後期まで活力が維持されるように栽培管理や施肥管理を改善する。

※今後、東近江地域での実証ほや農業技術振興センターにおける試験結果等を踏まえ栽培こよみを一部改訂する予定です。